

カルチャー・ショック 外国人のみた日本



Jun Je-Goo
出身地：韓国・忠北
所属：産業資源部
日本滞在：2007年1月～

私の二回目の日本生活

全 濟九

日本で約二年間の留学生生活を終えて韓国に帰ったあと、今回六年ぶりにもう一度日本で勤務することになった。前回の留学生活では家族みんなが日本へ来ることができず、楽しく過ごせたが、今回は高校三年生になった長女を大学受験のために韓国に残しているため、いつも気になっている。

日本の生活で必要なものは自転車である。自転車さえあれば車では近づけない路地の目的地まで行くことができ、便利であり、交通費も節約できて経済的である。韓国でも最近、自転車を通勤に利用しようという運動が全国的に行われている。近年韓国の各地方自治体では道路に自転車専用レーンを新たに作って、自転車に乗りやすい環境を整備している。自転車を乗ると自動車排気ガスによる大気汚染を抑制でき、健康にも役立つ一石二鳥の効果がある、と政府は幅広くマスコミを通じて広報している。

ところが我々家族が乗る自転車を日本で買う際に「事件」が発生した。私と妻、次女の三人で三台の自転車を購入することにした。配達に七日くらいかかるというので、すぐに必要な妻と私の自転車は店で直接受け取り、娘の分は配達させることにした。自転車屋さんによれば、二台を同一住所に配達する場合は販売促進キャンペーン

により、配送料が無料になるということだった。三台買って一台だけ配達させる場合でも、その一台に対する配送料は当然無料になると思っていた。

しかし、自転車屋さんは一台中の配送なので配送料を支払わなければならないと言った。韓国人である私の考えでは、三台も買っているわけだし、二台を配送するより一台を配送する方が楽なはずだが、なぜ配送料を支払うべきか理解ができなかった。おそらく、二台以上配送した場合は無料という文句を拘子定規に適用したためなのだろう。結局、すぐに自転車が必要だったので配送料を支払ったが、もつと融通を利かせてくれてよかったのではないかと。

外国人が日本を訪問した際に感じたことで、必ず言及されるのが日本人の親切さである。私も留学時代になじみのないところに行く時は通りがかりの人に道を聞くことがよくあった。忙しいはずなのに詳しく説明してくれることもあり、たまたまが、わざわざ目的地まで同行してくれたり、周りの人に聞いて案内してくれる人までいた。私が韓国で外国人にあのように親切に案内してあげられるか、我が身を振り返って考えてみることもしばしばであった。

日本人は韓国人よりもよく漫画を読む。

あるとき、都内で信号を待っていたタクシーの運転手さんが漫画を読んでいた。ちょっと見た限りでは五〇歳は越えていたと思う。漫画は子どもが読むものだという認識が支配的な韓国では、想像もできない光景だった。ある日、日本人の友人に「韓国の親は子供が漫画を読むことが好きではない。日本ではどうか」と聞いてみた。友人曰く、「日本の親は漫画を読むことに文句をいわない。漫画はユーモアと想像力を豊かにして暗記力を養うなど、子供の成長に役立つことも多い。だから何もいわない。しかし、コンピュータゲームには反対する。頭が悪くなるし目にもよくないからだ」。漫画よりコンピュータゲームに寛大な韓国の親に聞かせてあげたい答えだった。

日本での買い物は私に期待と楽しさを与えてくれる。韓国よりも割引してくれる行事が多いからだ。タイムセール、深夜セール、土曜セール、日曜セール等、数多い割引行事がある。今日はどんな品目かどのくらい割引になるのか、いつも期待させられる。今晚も日本の多様な食材を買って作る夕食を楽しみながら、二回目の私の日本生活をどのように有益に過ごすか、思いをめぐらすことにしよう。

(海外客員研究員／原文日本語)

カルチャー・ショック 日本人のみた外国

ロープ王国のリスク管理について

水野順子

中国のリスク管理について幾つかのエピソードを紹介して、日本人のリスク管理に対する関心を高めたいと思う。

筆者は、二年ほど前に一年ばかり上海に滞在した。その体験から①偽札に対するリスク管理、②博物館などのレプリカの展示、③印鑑のリスク管理について述べてみたい。

日本では、リスクの無いのが当然で、何か問題が発生したら、偶然不幸に出会ったものという認識が一般的である。しかし、上海ではリスク管理ができていなかったのが問題が発生したという考え方が一般的であった。もちろん問題が発生しないほうが良いことは明らかであるが、管理して問題が起るのと、管理しないで問題が起ることには違いがある。グローバル化



紙幣カウンター機能付の偽札鑑別機が現在では普及しており、鑑別機能のみのはあまり目にしてはなくなった。例えば100元札1枚で買物をする必要はないにもかかわらず、このような大きな機械にお札を通して（森永正裕氏写真提供）

最初には偽札に対するリスク管理について述べる。上海では小さな店ほど札を透かしてみる小型の機器が置いてある。支

払いに札を出すと、まずは、手で触って確認し、電灯で透かして確認し、最後に専用の機器で透かして確認する。少なくとも三回は確認作業を行って受け取る。ちなみに一体どこを確認しているのかと尋ねると、丁寧の確認場所を教力所（四カ所以上ある）教えてくれた。道端で商売をする人は、小型の確認機器がないので驚くほど入念にチェックし、それもまた面白いものである。

次に、上海博物館のレプリカの展示について述べる。上海博物館では、英国のピクトリア・アルバート・ミュージアムに展示してあるような大きなみことな壺などの作品が無造作に展示してある。博物館の入り口には「これらは皆レプリカである」と断り書きがついている。もし地震などで展示品が破損したとしても、レプリカなので問題は無い。これなどは地震王国の日本は、大いに学ぶべきことであろうと思った。日本の地震で国宝級の仏像などが破損し、修復の予算が無いことなどが報道されると、筆者はいつも上海の博物館にリスク管理を学ぶべきであると思うのである。念のため付け加えるなら、上海には、ここ一〇年くらいほとんど地震が無いので、レプリカの展示が地震対策ばかりではなく、盗難にも備えていることは言うまでもない。

最後に印鑑について述べる。日本は印鑑王国で銀行の通帳をはじめ何にでも印鑑を押す。しかし、中国の銀行預金通帳には印鑑が必要でなかった。これは、意外であった。印鑑はもつと重要なことに使用し、滅多に使用するものではなかった。中国は基本的にサインで用事を済ますことのほうが多い。筆者が、北京のホテルに宿泊した時、証明する宿泊証明書を出して欲しいとフロントにお願いすると、フロントは快く証明書を発行してくれた。しかし、その証明書に押印がなかった。筆者は押印した証明書が必要であると要求した。すると一旦奥に相談に行った担当者は、戻って来ると押印したものは出せないと言った。なぜなら押印した書類を渡して、それを受け取った人がもしも落したり、紛失したりすれば、その書類を拾った人が、印影から印鑑を偽造して使う恐れがあるからである、と説明してくれた。筆者はその用心深さに感心するとともに、中国の印鑑とは日本という実印に相当するもので、非常に重いものなので、滅多に外向けに使用するものではないということを知った。

（みずの じゅんこ／アジア経済研究所
新領域研究センター）